

みずほマーケット・トピック(2020 年 2 月 12 日)

流動化し始めたドイツ政局～メルケル退陣まで 1 年半余り～

ドイツ政局がにわかに流動化している。過去 1 週間で起きた事件は 2 つ。1 つが旧東ドイツ地域のチューリンゲン州での州首相選出にまつわる混乱、もう 1 つがメルケル首相後継者を巡る混乱である。前者の事件が後者の事件のトリガーになった格好。現在、先進国で最長の在任期間を誇るメルケル独首相が退任するまで 1 年半余り。多党連立が不可避になっている現状を思えば、今後も類似の動きが頻発する恐れはある。ナチスの経験に圧倒的な危機感を持つドイツですら極右の台頭を懸念しなければならなくなっている現状は、欧州統合プロジェクトの試練を示しているという論調は多い。しかし、今のドイツで起きている政変は欧州統合以前にドイツ自身の責任もある。具体的には、メルケル首相が 15 年 9 月に決断した難民・移民の無制限受け入れ政策に起因している部分は大きい。一連の政局混乱が照射しているのは「EU の問題点」もさることながら、「メルケル政権の日和見主義と理想主義の問題点」と考えたいところ。

～ドイツ政局、2 つ事件～

ドイツ政局がにわかに流動化している。過去 1 週間で起きた事件は 2 つ。1 つが旧東ドイツ地域のチューリンゲン州での州首相選出にまつわる混乱、もう 1 つがメルケル首相後継者を巡る混乱である。前者は 2 月 5 日から 6 日にかけて、後者は週末を挟んだ 2 月 10 日に起きた。現在、先進国で最長の在任期間(2005 年 11 月～)を誇るメルケル独首相が退任するまであと 1 年半余りというタイミングで起きた今回の動きは、今後も類似の動きが頻発する恐れがある。

～「極右の力を借りた州首相」の誕生～

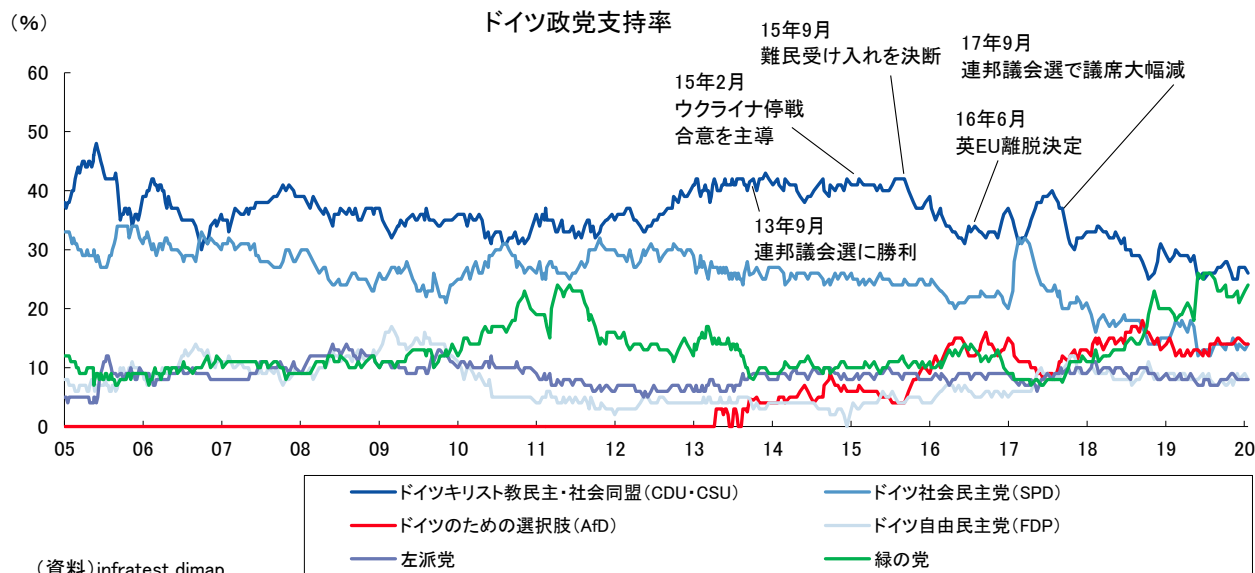
厳密には前者の事件が後者の事件のトリガーになった格好である。歴史的教訓から極右勢力を忌避することが自明の前提とされているドイツ政界(というよりもドイツ社会)において極右政党「ドイツのための選択肢(AfD)」の支持を得た州首相が誕生するという事案が発生した。どの政党も AfD とは組まず、AfD に係るメディア露出も抑制されているという状況で起きた今回の動きについて、「歴史的タブーが犯された」として大きな衝撃をもって伝えられている。既に同州では昨年 10 月の州議会選挙で左派政党(Die Linke)と AfD が同州議会議席の過半数を握っており、危うい雰囲気はあった。また、同州はナチスが初めて閣僚を出した州という文脈からも耳目を集めている。

経緯については若干の説明が必要だろう。チューリンゲン州首相を選出する投票では左派政党所属で現職のラメロウ州首相が再選を目指し、従前通りの社会民主党(SPD)および緑の党と連立を目指したが、過半数を取ることができなかった。三度目の投票までもつれたところで、自由民主党(FDP)からケメリヒ氏が立候補し、与党・キリスト教民主同盟(CDU)および AfD の支持で勝利するという顛末を辿った。なお、同州議会の勢力図をおさらいしておく。第 1 党が左派政党(Die Linke)、第 2 党が AfD、第 3 党が CDU であり、ケメリヒ氏所属の FDP は第 6 党であった。第 6 党の候補が

3 度目の投票で突然現れ、第 2 党と第 3 党の支持を得て選出されたことについて、クーデターや密約、八百長といったフレーズが付いて回っている。

もちろん、ケメル氏は AfD と密約を否定しているが、疑惑が色濃く残る結果となった。ここまでの 2 月 5 日の出来事であるが、翌 6 日にはケメル氏は僅か 1 日で辞任を迫られている。ドイツ政界のみならず社会全体として「極右の力を借りた州首相」を許容する準備はできておらず、猛烈な批判を受けての辞任となった。ケメル氏自身、政権運営に AfD を関与させることはないと言明し、連立参加や閣僚選出を否定しているものの、「極右の力を借りた州首相」のレッテルがなくなるわけでもなく(しかも一票差での選出である)、政権の持続可能性を考えれば辞任は賢明だったと言える。

即座に辞任まで追い込んだドイツ社会の持つ自浄能力には安堵感も覚えるが、他ならぬ政権政党である CDU が「極右の力を借りた州首相」の誕生に一肌脱いだという気持ち悪さは残る。また、AfD がキャスティング・ボートを握り、地政や国政への影響力を行使する環境が生まれ始めていることも今回の事案で明らかになった。政党支持率を見ると、連立政権を形成する CDU と SPD で約 40%、緑の党が野党・第 1 党で 22%、AfD はこれに次ぐ 14% で野党・第 2 党である(図)。今後、チューリングゲン州で起きたような混乱が起きても全く不思議ではない。



～ミニ・メルケル退場～

こうした地政の混乱は国政にも影響を及ぼした。これが 2 つ目の事件だ。上述したように、早期辞任に至ったとはいえ、「国政第 1 党の CDU が極右政党と一緒にあって候補者を支持した」という気持ち悪さはやはり残る。クランプカレンバウアー党首は、ケメル氏支持はあくまでチューリングゲン州の党組織による独自判断であり、CDU として AfD や(ケメル氏所属の)自由民主党と連立する考えを持っているわけではないとの立場を表明したが、当然、国政で連立を組む SPD は「タブーを破った CDU」を批判する。折りしも SPD は左派路線への回帰を目指していたところであり、「極右と結託した疑いのある CDU」と連立を続けることについて党内外からの風当たりが厳しくなるだろう。

こうした混乱の最中となる今週 10 日、クランプカレンバウアー氏が次期首相候補になることを諦め、党首も退任する方針を表明した。左右両勢力に分散する支持率、まともに欠ける党内情勢を「強い遠心力」と表現しての退場であった。元より保守色(右派)の強い CDU だが、メルケル首相の

機を見るに敏な(悪く言えば日和見的な)政策運営によって左傾化が進んできた。それが長年のライバルだった SPD の支持層を切り崩したわけだが、近年はそうした左右に偏らない中道的な政治姿勢が極左・極右からの挟撃を受け支持率の低迷に繋がってきた。また、見方を変えれば、日和見的なメルケル首相の政治手法が極まった結果が今回の「極右(AfD)と同一候補を支持する」という動きにも繋がったのだろう。もちろん、メルケル首相がそうした展開を主体的に望んだとまでは言わない(メルケル首相は「許せない。民主主義にとってひどい日になった」と述べている)。だが、今回のような事件に至る党内外の情勢をメルケル首相自身が作ってきた部分もあった。

話を本題に戻す。2018 年 12 月、クランプカレンバウアー党首は党幹事長から CDU 党首に抜擢された。「党幹事長→党首→首相」はメルケル首相が歩んだ出世街道であり、女性であることも相まって「ミニ・メルケル」として次期首相筆頭候補と見なされてきた。当然、2021 年の連邦議会選挙でも CDU の看板として戦うことが目されていたし、「党首と首相が異なる」という異例な構図もメルケル首相の分身としてスムーズな引継ぎが可能になるとして好意的に評価する声もあった。しかし、この青写真はわずか 1 年余りで挫折した。元より失言(2019 年 6 月、ネット上での言論規制を示唆)や地方選挙での連敗で求心力が揺らいでいたところに、今回のチューリンゲン州の事件が止めを刺した格好である。AfD と CDU が共に投票した候補が選出されるという事態は、本人がそれを望んでいなかったとしても、党内への掌握力が弱まっていることの証左なのかもしれない(ケメリヒ氏は 1 日で辞任したものの、新たな州首相を選出できず混乱は続いている)。

～次の候補者でメルケル路線と決別するか？～

いずれにせよ CDU の次期首相選びは振り出しに戻った。前頁図に示される通り、クランプカレンバウアー氏が就任した 2018 年 12 月以降も CDU の支持率は 20% 台で低空飛行が続いていたので、今回のチューリンゲン州の事件がなくともクランプカレンバウアー氏は遅かれ早かれ退場したのかもしれない。なお、連邦政府首相にメルケル氏、CDU 党首にクランプカレンバウアー氏とする現行体制は直ぐに変わるわけではなく、2021 年の総選挙までは続く。また、クランプカレンバウアー氏は昨年 7 月から兼任している国防相には留任する見込みである。

これから 1 年半余りかけて CDU は「2021 年の総選挙、ポストメルケルとして誰を担いで戦うべきか」という課題と向き合うことになる。SPD が連立解消を申し出ればその時点で総選挙もあり得るが、今、選挙に踏み切っても SPD にとって有利な状況とは言えないため可能性は低い。CDU における大方の方針が定まったところで、クランプカレンバウアー氏は党首を辞任すると見られ、現状、最有力の後継者は最大州であるノ르트ライン・ヴェストファーレン州の州首相を務めるラシェット副党首と言われている。中道であるがゆえに支持を得やすいという話だが、そのようなメルケル路線こそが現状を招いたという批判もある。メルケル路線との決別を図るのであれば、より保守色の強いメルツ元院内総務やシュパーン保健相といったメルケル首相の政敵も対抗馬として浮上してくる。

～浮き彫りになったのは「メルケル政権の日和見主義と理想主義の問題点」～

もっとも、ここまで既存政党(CDU/CSU、SPD)が凋落している以上、連立政権の組み合わせ次第では野党・第一党である緑の党から首相(党首はハベック党首)が出ても不思議ではない。昨今の欧州における偏執的な環境保護機運を思えば、十分あり得るシナリオだ。ドイツに限らず欧州で

は極右・極左(端的にはポピュリスト)政党の台頭によって既存政党が安定多数を取れず、複数政党による連立政権を目指す動きが珍しくなっている。こうした状況下、極右・極左政党が間隙を突いて今回のような事件が起きやすくなっている。ナチス前後で歴史を分断して考えるドイツのような国でも、極右の台頭を懸念しなければならなくなっている現状は、欧州統合というプロジェクトがかつてない試練に直面していることの証左だという論調は多い。

しかし、今のドイツで起きている政変は欧州統合以前にドイツ自身の責任であろう。具体的には、メルケル首相が 2015 年 9 月に決断した難民・移民の無制限受け入れ政策に起因している部分が大いと考えたい。あの決断がパスポートコントロール(国境検査)の復活を招き、西欧(≒ドイツ)と東欧の亀裂をもたらし、経済が磐石だったにもかかわらずメルケル首相に政界引退宣言をさせるにまで至った。また、合意形成が困難な難民・移民の受け入れ配分に時間を空費せざるを得なくなり、EU 改革が頓挫したことも見逃せない。今回のドイツ政局における 2 つの事件が照射しているのは「EU の問題点」もさることながら、「メルケル政権の日和見主義と理想主義の問題点」である。

市場営業部
チーフマーケット・エコノミスト
唐鎌大輔(TEL:03-3242-7065)
daisuke.karakama@mizuho-bk.co.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

バックナンバーをご希望の方は以下のサイトからお取り頂くことも可能です
<http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ.html> (Archives) http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ_backnumber.html

発行年月日	過去6か月のタイトル
2020年2月10日	良好な雇用統計が浮き彫りにした市場の「甘え」
2020年2月7日	週末版(上がりそうにない原油価格～3つの理由と共にドル/円相場への含意を考える～)
2020年2月6日	改善が続く企業マインドをどう読むべきか
2020年2月4日	ボンド相場の現状と展望～遠すぎる物価「2%」～
2020年2月3日	ブレグジットQ&A～アイルランド問題から漁業権問題へ～
2020年1月31日	週末版
2020年1月30日	FOMCを終えて～新型肺炎リスクと減速軌道の米国～
2020年1月29日	メインシナリオに関するリスク点検
2020年1月28日	デジタル通貨を巡る4大勢力～群雄割拠を読み解く～
2020年1月27日	疫病リスクと金融政策への影響などについて
2020年1月24日	週末版(ECB政策理事会を終えて～やや先走り感のあるラガルド総裁～)
2020年1月22日	日銀金融政策決定会合～「政熱経冷」という運～
2020年1月21日	ECB政策理事会プレビュー～底打ち機運に乗り静観～
2020年1月20日	米大統領選挙と為替～潜む一抹の不安～
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年12月分)
2020年1月17日	週末版
2020年1月15日	「1998～99年」との違いはどこにあるのか～その～
2020年1月14日	中国の為替操作国認定解除を受けて～ドル売り介入の催促～
2020年1月10日	週末版(「調達通貨は円よりユーロ」の答え合わせ～中東リスクを前に～)
2020年1月9日	予防的利下げの成否～'98年型利下げ」と'99年型利上げ」～
2020年1月8日	軍事衝突と原油高への考え方～円高は不幸中の幸いか？～
2020年1月6日	2020年、レンジ脱却に必要なもの～その～
2019年12月25日	2020年、レンジ脱却に必要なもの
2019年12月24日	2020年の想定外はどこにあるのか？～6つの論点～
2019年12月23日	スウェーデン、マイナス金利解除の読み方～2020年への示唆～
2019年12月20日	週末版
2019年12月19日	米大統領選挙の左派リスクは2020年の波乱要因か？
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年11月分)
2019年12月18日	やはり上げを失ったボンド相場～政治も金融もボンドの足枷～
2019年12月17日	日銀金融政策決定会合プレビュー
2019年12月16日	英総選挙を終えて～「次の山」は2020年6月末に～
2019年12月13日	週末版(ECB政策理事会を終えて～フクロウ型総裁の「人となり」～)
2019年12月12日	FOMCを終えて～「タカ派的利下げ」から「ハト派的現状維持」～
2019年12月11日	円の基礎的需給環境～基礎収支に映る変化～
2019年12月10日	道標を失った為替市場～マイナス金利解除がキーに？～
2019年12月9日	英国総選挙の論点整理～事実上、2度目の国民投票、～
2019年12月6日	週末版(2019年の為替市場を概観する～円は結局強かった～)
2019年12月5日	ECB政策理事会プレビュー～デビュー戦、3つの見どころ～
2019年12月3日	ドイツ政局の流動化について～メルケル退任まであと2年～
2019年12月2日	金融政策に環境配慮は必要か？～制御すべきは気候ではなく物価～
2019年11月29日	週末版
2019年11月26日	円安リスクの点検～「ツケ」が怖い2020年～
2019年11月25日	名目実効為替相場(NEER)で読む2019年のドル相場
2019年11月22日	週末版(ドラギ元総裁、最後のECB政策理事会議事要旨～「結束(unity)」と財政政策～)
2019年11月20日	「ドル化した世界」で進む「金融政策の一本化」
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年10月分)
2019年11月19日	ドイツは底打ちしたのか？～リセッション回避も残る不安～
2019年11月18日	「株値の崩」と「予防的緩和」について考える
2019年11月15日	週末版(ラガルド体制の「overhaul(刷新)」ミッションの行方～総裁会見と投票方式について～)
2019年11月14日	欧州の「弱さ」源泉～輸出拠点が裏目にたドイツ～
2019年11月13日	円高予想の誤算と「ドル化した世界」という悩み
2019年11月12日	動かない相場の背景にある「円の不人気」
2019年11月11日	「公的デジタル通貨 vs. リブラ」の様相に
2019年11月8日	週末版
2019年11月1日	週末版
2019年10月30日	ラガルド新ECB総裁を巡る3つの論点
2019年10月29日	円安リスクの点検～欧州・中国の復調はあるか？～
2019年10月28日	ドラギ総裁最後のECB理事会～危機の「生き字引」～
2019年10月25日	週末版
2019年10月24日	またも史上最小値幅～体感「5円」以下という異例～
2019年10月23日	「リブラ」阻止で一致するG20～ザッカーバーグ証言を前に～
2019年10月21日	思い出したい「10月31日」の経緯～次に起こることは～
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年9月分)
2019年10月18日	週末版(2度目の離脱協定案合意～3つの論点を整理～)
2019年10月16日	FRBのTB購入を受けて～欲しかった「ずる賢さ」～
2019年10月11日	週末版(ECB政策理事会議事要旨を受けて～議論紛糾の読み方、議事要旨としては秀逸～)
2019年10月10日	円相場の需給環境について～縮小均衡～
2019年10月9日	FRBの資産購入再開と懐かしのソロスチャート
2019年10月8日	揺らぐリブラ計画～初のメンバー脱退表明を受けて～
2019年10月7日	米9月雇用統計を受けて～「思ったより悪くない」の危うさ～
2019年10月4日	週末版(製造業から非製造業への波及は始まったのか～ISM景気指数の悪化を受けて～)
2019年10月3日	ユーロ圏の物価情勢の現状と展望～日本化の過渡期？～
2019年10月2日	ISM製造業景気指数の「底」は見えそうか？
2019年9月27日	週末版(三度起こった「ドイツの乱」～ラウテンシュレーガーECB理事辞任の読み方～)
2019年9月26日	円安リスクの点検～財政政策というアップサイドリスク～
2019年9月25日	為替相場の現状を概観する～REERを通して見えること～
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2019年8月分)
2019年9月24日	「羊頭狗肉」化するマイナス金利政策
2019年9月20日	週末版(日米金融政策決定会合を受けて～9月乗り切るも日銀の難局は続く～)
2019年9月17日	「原油高&円安」が重荷になる日本経済
2019年9月13日	週末版(ECB政策理事会レビュー～出尽くし懸念強まるパッケージ緩和～)
2019年9月11日	均衡イメージが変わらない円の基礎的需給環境
2019年9月10日	日銀会合プレビュー～9月の一手と利下げの行方～
2019年9月6日	週末版(ECB政策理事会プレビュー～APP再開は困難だが、露払いはいはしたいところ～)
2019年9月5日	ブレグジットを巡る論点整理～ボンド/ドルは1.20割れ定着か～
2019年9月4日	米企業心理とドル相場の関係～ISM悪化を受けて～
2019年9月3日	リブラを全否定したメルシュ講演～不安はどこに～
2019年9月2日	消えない米国のドル売り介入観測について～諸刃の剣～
2019年8月30日	週末版
2019年8月29日	ユーロ圏投資ファンド統計に見るポートフォリオリバランス効果
2019年8月27日	円安リスクの点検～警戒すべきトランプ減税第二弾～